

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”.
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 五百弟子受記品 第八』 (迹門・正宗分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習学せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』 (法師品 二〇九頁三行))

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例: (P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)

◇ ◇ ◇
＜五百弟子受記品のあらすじ＞

『化城諭品』仏弟子の私たちと仏さまとの『宿世の因縁』を、『化城諭品』を通して教えていただき、一同は得も言えぬ有り難い気持ちになりました。そして、『こうして有り難い“安堵感”を覚えるだけで、その人は、すでに真の救われである『仏の智慧を得る道』に入っているのです (『既すでに是(これ)息(やす)み已(おわ)んぬと知れば 佛慧(ぶつて)に引入(いんにゅう)したもう』)』と説かれて、一同はさらに大きな感動を覚えたのでした。

【感動した富楼那(ふるな)が仏さまを供養する】—

【一三頁一行】その時、十大弟子の一人で『説法第一』と称(しょう)せられていた富楼那(ふるな)尊者(富楼那弥多羅尼子(ふるなみたらし))は、智慧に満ち溢(あふ)れた世尊の説法を伺ったことと、『警諭品』と『授記品』で舍利弗(しゃりほつ)や四大声聞への授記を目(ま)の当たりにし、そして先の『化城諭品』で自分たちが仏さまと「過去世からの尊い因縁」があることを知り、これまで経験したことのない心躍(こころおど)る深い感動と感激を覚えました。そして仏さまの御前(おんまえ)にまか

り出て、額を仏の足につけて礼拝し、そして一步退(しりぞ)いて仏さまの尊い顔を仰(あお)ぎ見、まじろぎもせずじっとしました。

【富楼那(ふるな)が仏さまを讚歎】——

【一三頁 五行】そして富楼那(ふるな)は、心のなかでこう思うのでした。

「世尊は計り知れなく尊いお方だ。あらゆる人々に的確な方便を用いて教えを説き、／『衆生處處(しゅじょう)の貪著(どんじゃく)を拔出(ぼつすい)したもう』衆生を『貪欲と執着』から解き放ち救ってくださる。そのような仏の功德の素晴らしさは、言葉をもって表現することはできない。／『唯佛(ただぶつ)世尊のみ能(よ)く我等が深心(じんしん)の本願を知(しる)しめせり』我々は世尊にすべてをお任せしよう。なぜならただ世尊だけが私たちの心の奥深くにある本当の願いをご存知でいらっしゃるからだ」

【世尊が富楼那(ふるな)の徳(人を正しく導く『説法第一』の徳分)を讃える】——

【一三頁 終二行】すると世尊は、多くの比丘たちに向って、こう言われました。

「富楼那(ふるな)は／『其(そ)の説法人の中に於て最も第一たりと称し』説法者のなかで最も優れた者です。それゆえ『説法第一』と讚(た)えてきました。富楼那はこれまで私の教えをしっかりと護持(ごじ)し、／『能(よ)く四衆(しじゅう)に於て示教利喜(じきょうりき)し』その教えが正しく世に広まるように『示・教・利・喜』の順序で人々を導き、多くの人々に大きな利益(りやく)を与えてきました。／『如來を捨(お)いてよりは、能(よ)く其の言論(ごんろん)の辨(べん)を盡(つ)くすものなけん』如來以外には富楼那ほど正法に基づく説得力を持つ者はいません。みなさんは富楼那がこの世において法を説き弘めていると思うかもしれませんが、じつはそうではありません。富楼那は今世ばかりでなく、過去世においても九十億にも及ぶ無数の仏のもとで正法を護持し、／『彼(か)の説法人の中に於ても亦(また)最も第一なりき』この世界においても教えを説き弘める説法の第一人者であります」

【一四頁 六行】「『又(また)諸佛所説(しよせつ)の空法(くうぼう)に於て明了(みょうりょう)に通達(つうだつ)し』富楼那は『空』の教えを完璧に理解しており、その教えを人々に説くうえで、『四無礙智(しむげち)』という四種類の自由自在な説法力を具えています。過去世においても常に教えを解りやすく、かつ、清らかな心で教えを説き、人々が疑惑を起こすことなど全くありませんでした。／『菩薩神通の力を具足し、其の壽命に隨(したが)って常に梵行(ぼんぎょう)を修(しゅ)しき』そればかりか富楼那は、『菩薩』としての大神通力を身につけ、寿命のある限り心身を清くして修行精進しました。／『彼(か)の佛世の人咸(ことごと)く皆、之(これ)を實(じつ)に是(これ)聲聞(しょうもん)なりと謂(おも)えり』そして『菩薩』の身であるにもかかわらず、わざわざ方便力を用いて自らを『声聞』のごとく立ち振る舞い、そのため人々は富楼那を身近な『声聞』であると思い、／『而(しか)も富楼那は斯(こ)の方便を以て無量百千の衆生を饒益(にょうやく)し、又(また)無量阿僧祇(あそうぎ)の人を化(け)して阿耨多羅三藐三菩提(あくとらさんみゃくさんぼだい)を立てしむ』その結果、無量阿僧祇(あそうぎ)と言うはかり知れない数の衆生は、多くの利益(りやく)を得ることができたのでした。そればかりか衆生は、最高無上の悟りを得ようという心を起こすのでした。このように富楼那は、世界を清らかに美しくするために常に仏の聖行(せいぎょう)を実践し、衆生を教化しました」

【一八四頁 終二行】「比丘たちよ。富樓那は過去の七仏のもとにおいても説法の第一人者、『説法第一』であり、現在においても同じく『説法第一』であり、未来世においてもあらゆる諸仏のもとにおいて『説法第一』であります。そして仏の聖行(せいぎょう)を助け、教えを説き弘めて行くでしよう。そればかりか富樓那は未来世に於いて無数の仏の教えを護持し、数知れぬ多くの人々を教化して大きな利益(りやく)を与え、人々は無上の悟りを求める志を起こさしめるのです。そして世界中を美しく清らかにするために一生懸命精進し、衆生を教化していくでありますよ」

【富樓那(ふるな)への授記】——

【(偈)一八頁 三行】「そして富樓那は多くの如来を供養し、法を護持して、未来世において仏と成ることができるのであります。名は『法明如来・ほうみょうにらい』と言い、国は『善浄・ぜんじょう』と言い、計り知れない功德が充満し、莊嚴に美しく輝いています。時代の名は『宝明・ほうみょう』と言います」

【一八五頁 四行】「富樓那(ふるな)は菩薩の道完璧に行ない尽くし、無量阿僧祇劫(あそうぎこう)という長い時を経て、仏と成るでしよう。仏の名は『法明(ほうみょう)如来』と言い、ガンジス河の砂の数ほどの多くの国々が分け隔(へだ)てのない一つの国とします。その国は美しい七宝(しっぽう)で作られ、地形の高低などなく、まるで手のひらのように平らかで山や谷、溝(みぞ)などありません。七宝(しっぽう)で作られた宮殿は地上から浮かび上がり、／『人・天(にん・てん)交接(きょうじょう)して両(ふた)つながり相見(あいみ)ることを得ん』人間界で法が説かれたために天上界との差がなくなりました。人間界の人は天上界を間近に見ることができ、一方、天上界の者は人間界を見ることができるようになります。そして天上界と人間界の人たちが交流し合うのでした」

【一八五頁 終三行】「その世界には『悪の道』はなく、また男女の差別もありません。一切衆生はみな素晴らしい精神性を持つ人間として生まれ変わり、淫(みだ)らな欲などありません。人々は素晴らしい大神通力を身につけ、全身からは常に光明を発し、／『飛行自在(ひきようじざい)ならん』あらゆる所へと自由に飛んで行ける囚(とら)われのない自由自在の身となるでありますよ。そして、仏の道を実践する決意と志は大変固く、一心に精進してすぐれた智慧を得、金色(こんじき)に輝いて仏の三十二の徳相を具えるのでした」

【一八六頁 一行】「『其(その)の國の衆生は常に二食(にじき)を以てせん。一には法喜食(ほうきじき)、二には禪悦食(ぜんねつじき)なり』その国の人々の食べ物二つだけです。一つは『法喜食・ほうきじき』といって『法を聞く悦び』。もう一つは『禪悦食・ぜんねつじき』という『法を修行する悦び』です。この『法喜食・禪悦食』を食物とし、その他の食物を欲することはありません。【(偈)一八頁 五行】そしてその国の衆生は、淫(みだ)らな欲を消え去っており、清らかな精神の持ち主として生まれ変わった人たちがばかりです。／『諸(もろもろ)の女人あることなく亦(また)諸(もろもろ)の惡道なけん』その国では、男女の差別なく、すべてが尊い存在として讃えられ、諸々の悪徳など存在しません。／『無量阿僧祇(あそうぎ)千萬億那由他(なゆた)の諸(もろもろ)の菩薩衆あり、大神通・四無礙智(しむげち)を得て善能(よ)く衆生の類(るい)を教化せん』またその国には、無量阿僧祇(むりょうあそうぎ)千万億那由他(なゆた)というはかり知れない数の菩薩があり、みな大神通力を具え、衆生が一切の障(さわ)りがなく智慧を得られるよう教化します。そういう菩薩が国中に充満しています。【(偈)一八頁 五行】『菩薩衆甚(はなは)だ多く其(その)の数無量億にして皆大神通に度(わたり)威徳力(いとくりき)具足(ぐそく)して其(その)の國土に充満せん』それら無数の菩薩は、みな大神通力を具え、教えを自由自在に説く智慧を

持っています。大いなる徳で人を感化する力を具え、的確に衆生を教化します。そして、仏の教えを学ぶ声聞(しょうもん)たちも無数におり、すべての声聞は、**六神通**という六つの神通力を具え、**八解脱**という解脱のための禪定に入る八種的能力を具え持つのでした」

【一八六頁 六行】『**法明如来・ほうみょうによらい**』の国は、以上のように計り知れない功德で充満し、莊嚴に美しく輝いています。

【(偈)一八八頁 終行】「『**是(かく)の如き無量の事(じ) 我今(われいま)但(ただ)略して説く**』 富樓那は完全な徳分を具えて、以上の国での如来となるのですが、ここで説く富樓那のすばらしさは、まだ、簡略して説いているにすぎません」

【富樓那の『半歩主義』を讃える偈(げ)】——

すると世尊は、以上の意味を重ねて説くために『偈』をお説きになりました。

【(偈)一八六頁 終三行】「諸々の比丘たちよ。よく聞きなさい。／『**佛子所行(しよぎょう)の道(どう)は善(よ)く方便を學せるが故に 思議(しぎ)することを得(う)べからず**』 眞の仏弟子は、人に応じ、場合に依じてさまざまな手段を用いて導くことに精通(せいとう)していますから、その内容はとても人知(じんち)の及ばない不思議に満ちたものです。大衆は初歩的な教えを好み、深い智慧を敬遠(けいえん)するものです。／『**諸(もろもろ)の菩薩 聲聞・縁覚と作(なり)無数(むしゅ)の方便を以て 諸の衆生類(るい)を化(け)して**』 そのことを菩薩は知っていますので、まずは、自らを一段下げて 声聞(しょうもん)や縁覚(えんかく)の姿となって現わし、さまざまな手段を用いて多くの大衆を教化して行くのです。／『**自(みづか)ら是(こ)れ聲聞(しょうもん)なり 佛道を去ること甚(はなは)だ遠しと説く ～ 小欲懈怠(けたい)なりと雖(いえど)も 漸(ようやく)く當(まさ)に作佛(きぶつ)せしむべし**』 そして『**自分自身はまだ声聞の身であって、まだ本当の悟りには程遠(ほどとお)い**』と言って大衆の立場に降り立ち、小法を欲して、大乘の教えを求めることを怠(おこた)る人々を救い、無数の衆生を次第次第に仏の悟りへと導くのであります。ですから自分は実際に『**菩薩の行**』を実践しているにもかかわらずそれを隠し、／『**内(うち)に菩薩の行を秘(ひ)し 外(ほか)に是(こ)れ聲聞(しょうもん)なりと現す**』 表面的には『声聞』であるかのように立ち振る舞うのです」

【菩薩でありながら、あえて『貪・瞋・痴』や『邪見』の身となって現われることがある】——

【(偈)一八七頁 四行】『**少欲にして生死(しやうじ)を厭(いと)えども 實(じつ)には自(みづか)ら佛土(ぶつど)を淨(きよ)む**』 「つまり外見上では、小乗の教えを求めて『人生の変化の苦から解(と)き放(はな)たれる』ことを信仰の目的としているように見えますが、じつは大乘の教えによってこの世を救おうとしているのです。『菩薩』は単に『声聞』の姿として現わしているのではなく、／『**衆(しゅ)に三毒ありと示し 又(また) 邪見(じゃけん)の相を現(げん)ず**』 ある時は凡夫が『**貪と瞋と痴**』という**三毒**を持っていることを示すために現われることもあり、またある時は間違った考え、つまり**邪見(じゃけん)**を持つ**外道(げどう)**を実際に示すために現われることもあるのです」

【(偈)一八七頁 五行】「私の弟子はこのように方便を用いて人々を救うのです。／『**種種の現化(げんけ)の事(じ)を説かば 衆生の是(こ)れを聞かん者 心に則ち疑惑を懷(いだ)かん**』 もし私が『菩薩たちは衆生を救うために様々な姿に変えてこの世に現われるのだ』と詳しく説くと、聞く人はおそろく困惑し、場合によっては疑いの心を抱くかも知れません」

【富楼那の『半歩主義』を讃える偈のつづき】——

【(偈)一八七頁 七行]「今ここにいる富楼那は、菩薩の一人です。富楼那は遥(はる)か昔、過去世に於いて千億の仏の元で、自分のなすべき修行を一心につとめました。そして仏の教えを護持(ごじ)し、教えを弘める努力をしました。無上の智慧を得るために諸仏に仕(つか)え、常に弟子たちの上位者として精進しました。／『多聞(たもん)にして智慧ありと現(げん)じ所説(しよせつ)畏(おそ)る所なくして能(よ)く衆(しゆ)をして歡喜せしめ未(いま)だ曾(かつ)て疲倦(ひげん)あらずして以(も)つて佛事(ぶつじ)を助(たす)く』」数多くの教えを聞いて完璧に智慧を身につけ、法を説く時は、何ものにも恐れず堂々と自由自在に法を説きます。いつも人々に喜びを与え、精進の手を抜いたり、怠(なま)けたり、精進の歩みを止めるようなことなどありません。富楼那はこのようにして常に仏の聖行(せいぎょう)を支えて来たのであります」

【(偈)一八七頁 終三行]「富楼那はすでに大神通力を具え、**四無礙慧(むげえ)**という自由自在に法を説くことのできる智慧を身につけています。あらゆる衆生の機根を知り分け、常に清浄(しょうじょう)な教えを説きます。大衆に理解できるように法の正しい意味を説き、千億という数多くの衆生を大乘の教えにとどめました。／『大乘の法に住(じゅう)せしめて自(みづか)ら佛土を淨(きよ)め』そればかりか心から法に帰依できるように導いてきました。富楼那はこうして世界中を美しく清くしてきたのでした。そして未来世においても無数の仏を供養し、教えを護持し、仏の聖行を助けて世界を寂光土へと変えて行くであります。富楼那は常に方便力を用い、法を説くことに何ら畏(おそ)れも障(さわ)りもなく、ついには、／『一切智(いっさいち)を成就(じょうじゆ)せしめん』すべて実相を知る最高の智慧を成就するのであります」

【千二百人の阿羅漢(あらかん)たちが受記を願う】——

【一八九頁 一行] 世尊が以上をお説きになると、それを伺っていた千二百の阿羅漢(あらかん)たちは、自由自在な心境になり、一斉に次のように思ったのでした。

「なんと素晴らしいことだろう。こんな感動は今までに感じたことはない。もし舍利弗(しゃりほつ)や摩訶迦葉(まかかしょう)などの大弟子に記莂(きへつ)を授けられたように、私たちにも『**成仏の保証**』を下さるならば、どんなに嬉しく有難いことか」そう思ったのでした。

【橋陳如(きょうじんにょ)をはじめとする千二百人の阿羅漢への授記】——

【一八九頁 三行] 『佛此(こ)れ等(ら)の心の所念(しよねん)を知(しろ)しめして』すると阿羅漢(あらかん)たちの心の中を見抜かれた世尊は、僧伽の代表格である長老・摩訶迦葉(まかかしょう)に向かって、次のようにお告げになったのでした。

「ここにいる千二百人の阿羅漢(あらかん)たちにも順を追って成仏の保証を授けましょう。まず、私の大弟子の一人である橋陳如(きょうじんにょ)比丘は、これから六万二千億というはかり知れない数の仏を供養し、阿僧祇劫(あそうぎこう)という長い年月を経(へ)た未来において仏となることが出来ます。名前を『**普明(ふみょう)如来**』と言います。身からは常に大光明を放ち、諸々(もろもろ)の神通力を具(そな)え、その名は十方世界の隅々(すみすみ)にまで知れ渡ります。そして普(あまね)く全ての人々から敬(うやま)われ、常に最高の教えである無上道を説き続けます。この意味から『**普明如来**』というのです。その国は清浄で美しく、【(偈)一九〇頁 三行] 『菩薩皆(みな)勇猛(ゆうみょう)』

ならん』菩薩たちはみな勇猛(ゆうみょう・積極で勇敢に)精進し、教えを実践することを躊躇(ちゅうちよ)しません。菩薩たちは天空にそびえる樓閣(ろうかく)に昇り、そして十方世界に赴(おもむ)いて布教伝道し、大きな喜びと感動を覚えながら精進します。また瞬時に本国へ戻って来ることができるという神通力も具えています。『普明如来』の寿命は六万劫という大変長い期間で、その寿命の二倍の年数、教えは正しく残り、さらにその二倍の期間、教えの形が残る像法(そうぼう)という期間を迎えるでしょう。【(偈)一〇頁 六行】『法滅(めつ)せば天・人憂(うれ)えん』そしてそののち教えが実践されなくなると、人間界と天上界の人々は苦しみ悩むことになってしまいます」【一八頁 八行】「また千二百人の阿羅漢(あらかん)のうちの五百の阿羅漢、すなわち優樓頻螺迦葉(うるひんらかしやう)・迦耶迦葉(かやかしやう)・那提迦葉(なだいかしやう)・迦留陀夷(かるたい)・優提夷(うたい)・阿兔樓駄(あぬるだ/阿那律あなりつ)・離婆多(りはた)・劫賓那(こうひんな)・薄拘羅(はくら)・周陀(しゅうた)・莎迦陀(しゃかた)などをはじめとする者たちは、みな仏の悟りを得ることができます。そしてみな同じく『普明如来』と言い、／『轉次(てんじ)して授記せん』次々に授記していくことになります。つまり、ある『普明如来』が入滅すると『私が滅度した後、そなたが仏と成るであろう』と順次成仏の保証をし続けていくであります。そして教化する国の様子は、今こうして私が教化している国の様子と同じであり、その仏の国の美しさや仏が具える神通力の内容、菩薩や声聞の様子、そして正法・像法の期間、さらには仏の寿命の期間については、私がこれまでに説いた通りと同じであります」

【方便品で『五千起去』した者たちへも授記】——

【(偈)一〇頁 終二行】「迦葉(かしょう)よ。今、示した五百人の阿羅漢(あらかん)たちはこのように授記され、とらわれのない自由自在な境地を得ることができますが、じつはその他の声聞たちも、同じような境地を得ることができるのです。／『其(そ)の此(こ)の會(え)に在(あら)らざるは汝當(まき)に爲(な)に宣説(せんぜつ)すべし』そして今、この場(ば)にいない者(もの)たち、すなわち先に『五千起去』した者(もの)たちと、今後法華經(ほっけ)を聞くであろう衆生(しゆじやう)も同様(どうがう)です。迦葉(かしょう)よ。その者(もの)たちにもしっかりと伝えるのです」

【真の悟りを得ようと求めなかった憍陳如(きょうじんによ)の懺悔】——

【一〇九頁 一行】すると、憍陳如(きょうじんによ)をはじめとする五百人の阿羅漢(あらかん)たちは、記莢(きべつ)を得た悦びに歡喜踊躍(かんぎゆやく)し、座から立ち上がって世尊の前に進み出ました。そして額(ひたい)を世尊の足に付けて礼拝し、『過(とが)を悔(く)いて自(みづか)ら責(せ)む』／これまで自分(おれ)たちが至(いた)らなかったことを『懺悔(ざんげ)』しました。

【一〇九頁 二行】「『世尊(よせそん)、我等(われら)常(つね)に是(こ)の念(ねん)を作(な)して、自ら已(す)でに究竟(くきやう)の滅度(めつた)を得たりと謂(おも)いき。今乃(いま)ち之(これ)を知(し)りぬ。無智(むぢ)の者(もの)の如(ごと)し』世尊(よせそん)よ 私(わが)たちはこれまで単(ただ)に煩惱(ぼんご)を取り除(と)きただけで『最終的(さいしゆてき)な悟(ご)り』を得たものだと思っていました。しかし今、それが誤(あや)りであったということが解(と)きました。私(わが)たちは本當(ほんたう)に無智(むぢ)でした。／『我等(われら)如來(にょらい)の智慧(ぢぢ)を得(え)べかりき。而(しか)るを便(すなわ)ち自(みづか)ら小智(しょうぢ)を以(も)て足(たり)ぬと爲(な)しき』私(わが)たちはそもそもが『仏性(ぶつじやう)』を具(も)っており、『修行次第(しゆぎんじ)で『如來(にょらい)の智慧(ぢぢ)』を得(え)ることができる身(み)でありながら、ただ煩惱(ぼんご)を取り除(と)くということだけで十分(じゆうぶん)だと捉(とら)えていました。本當(ほんたう)に浅(あ)はか

で愚かでありました。世尊よ。ここでこのことを譬え話を用いて申し上げたいと存じます」

【『衣裏繫珠の譬え・えりれいじゆのたとえ』——

【一〇九頁五行】「——貧乏で困っている人が親友の家を訪れました。そこでご馳走(ちそう)になり、すっかり酒に酔って寝入ってしまいました。ところが親友は急用ができてしまい、出かけなければならなくなりました。その親友は寝ている友を起こすのも気の毒だと思い、友がこれからの生活に困らないようにと、／『無價(むげ)の寶珠(ほうじゆ)を以て其(そ)の衣(ころも)の裏に繫(か)け』値(あた)いをつけることができないほど大変高価な『宝石』を着物の裏に縫(ぬ)い付け、そのことを知らせずに出かけて行きました。

【一〇九頁七行】やがて眼が覚めた友はすでに親友が家にいないことを知り、家を発(た)つことにしました。そしてその友はあてもなく彷徨(さまよ)い、放浪生活をするることになりました。友は大変苦勞し、その日暮らしをして、／『若(も)し少し得(う)る所あれば便(すなわ)ち以て足りぬと爲(な)す』少しの収入があればそれで満足するという日々を送り、【(偈)一〇三頁八行】／『更(さら)に好(よ)き者を願(ねが)わず』さらに向上を願うことなどしませんでした。自分の着物の裏に計り知れない価値のある『宝石』を持っていながらも、そのことにまったく気づきもしなかったのです。

【一〇九頁終四行】長い時を経(へ)たのち、その友は突然、親友と出会いました。すると親友はみすぼらしくなったその友に向かって言いました。『なんという愚かなことだ。立派な君がなぜ衣食を求めただけで生活して、こんなにやつれてしまったんだ。私は君が安樂に暮らせるようにと、私の家を訪ねて来てくれた時、君の着物の裏に計り知れない高価な宝石を縫い付けておいたんだ。ほら。今こうしてちゃんとあるじゃないか』／『而(しか)るを汝(なんじ)知らずして、勤苦(ごんく)・憂惱(いうのう)して以(も)つて自活(じかつ)を求むること、甚(はなは)だこれ癡(ち)なり』『この宝石のことを知らず、日々の生活にあくせくし、苦勞したり心配したりして毎日を送っていたとは、本当に愚かなことだ』と言って、着物の裏に縫い付けている『宝石』を示しました。そして、『さあ、この宝石を売って何一つ不自由のない満ち足りた生活を送りなさい』と言いました。その友はその『宝石』を見て大変喜び、にわかには富裕(ふゆう)の身となり、さまざまな財産を持つようになって思いのままの生活ができることになりました。

【(偈)一〇三頁終行】『我等(われら)も亦(また)是(かく)の如(ごと)し』じつは私どもは全くこれと同様です。

【一〇二頁三行】『佛も亦(また)是(かく)の如(ごと)し』そしてまさに世尊は、この親友のようなお方であり
—— 【衣裏繫珠の譬え・えりれいじゆのたとえ】

【前世の修行と現世の修行がつながっている。『願』は一世のものではない】——

【一〇二頁三行】憍陳如(きょうじんによ)をはじめとする五百人の阿羅漢たちは言葉をつづけます。

「『菩薩(ぼさつ)たりし時我等(われら)を教化(けわ)して、一切(いっせつ)智(ち)の心(こころ)を發(おこ)きしめたまひき。而(しか)るを尋(つ)いで廢忘(はいもう)して知らず覺(さと)らず』 前世において世尊がまだ菩薩であった時、私どもは世尊の教化を受け、一切の智慧を得ようという志を立てることができました。しかし現世に生まれてからはその志をすっかり忘れてしまい、真の智慧を得ようなど考えもしませんでした。／『既(すで)に阿羅漢道(あらかんどう)を得て自ら滅度(めつど)せりと謂(おも)い、資生(しじゆう)艱難(かんなん)にして少(すく)しきを得て足りぬとなす』 我々は煩惱を除く身となってそれで本当の安穩を得たものだと思ってい

ました。しかしそれは、生活のために苦しいはたらきをして、ほんの少しの収入を得て満足しているようなものでございました」

【一九二頁 五行】「『一切智の願(がん)猶(な)お在(あ)って失(う)せず』とは申しまして、一切の智慧を求めるといふ願いは、私どもの心の奥底でしっかりと息づいており、無くなったわけではありませんでした。世尊が今、私どもを悟らせるために『諸々の比丘たちよ。／『汝等(なんだち)が得たる所は究竟(くきょう)の滅に非(あら)ず』』お前たちが得た安心の境地とは、《最終的な悟り》、本当の涅槃ではないぞ。／『我久しく汝等(なんだち)をして佛の善根を種(う)えしめたれども、方便を以ての故に涅槃の相を示す』』前世において長い間、仏と成るための徳行の根をお前たちに植えさせて来たのだったが、現世になってその根から芽を出させるための方便として、安心の境地を示したのである。／『而(しか)るを汝これ實(じつ)に滅度を得たりと謂(おも)えり』しかしお前たちは、その安心の境地を《最終的な悟り》だと思い込んでしまった』とお教えてくださいました。世尊よ。このお言葉によって私ははじめて目が覚めました。／『世尊、我今乃(すなわ)ち知んぬ、實(じつ)に是(こ)れ菩薩なり』 私どもは、じつは『菩薩』であったということがハッキリと解りました」

【再び、以上のことをあらためて偈を以て説く】――

【一九二頁 終行】感激した憍陳如ら五百人の阿羅漢たちは、その思いを『偈』に託します。

【(偈)一九三頁 終行】「『世尊長夜(じょうや)に於て、常に愍(あわれ)んで教化せられ無上の願(がん)を種(う)えしめたまえり』』これまで私たちは苦に満ちた長い闇路の人生を送っておりました。そして世尊は、そのような私たちを可哀相だと思われて教化くださり、無上の智慧を求めようとお導きくださいました。／『我等無智なるが故に、覺(きと)らず亦知(またし)らず少(す)しき涅槃の分を得て自ら足りぬとして餘(よ)を求めず』』ところが我々は無智であるためにそのことを知らず、単に心のとらわれから離れることができただけで《悟り》を得たと思い、『もう、十分に悟った』などと思い込んで、それ以上の智慧を求めようともせずに精進の歩みを止めていました。／『今佛我を覺悟して實(じつ)の滅度に非(あら)ず佛の無上慧を得て爾(しこ)うして乃(すなわ)ち爲(こ)れ眞(しん)の滅なりと言(のたま)う』』ところが仏は我々に《最終的な悟り》を得させるために『それは本当の悟りではない。仏の無上の智慧を得てこそ、眞の涅槃、《最終的な悟り》に達したと言えるのだ』と仰せになりました」

【一同大歡喜し、これからの精進を誓う】――

【(偈)一九四頁 三行】「『我今(われいま)佛に従(したが)って授記・莊嚴(しょうごん)の事(じ)及び轉次(てんじ)に受決(じゅけつ)せんことを聞きたてまつりて身心(しんじん)徧(あまね)く歡喜(かんぎ)す』』只今、こうして私たちは仏さまから成仏の保証をいただき、私どもが仏と成る国の美しさや、無数の人々が欠々に授記し、仏に成るといふことを伺い、私たちはこの上ない感動に打ち震えています』と感謝を述べ、今後の精進を決意したのでした。



ゆうべん ゆうき ふるな
雄弁と勇氣の人 富樓那

(P16・終2行/P12・3行)

とんじゃく ぼっすい
貪着は拔出せよ

(P24・終2行/P18・1行)

われわれの欲望はなかなか完全におさえつけられるものではありません。それを自己完成(自利)のためと、社会向上(利他)のためのよいエネルギーに転化しさえすれば、自然に、欲望への貪りや執着から起こる(悪)は雲散霧消(うんさんむしょう)してしまうのです。

『衆生處處の貪著を抽出したもう』 (一八三頁 終四行)

『唯佛世尊のみ能く我等が深心の本願を知しめせり』 (一八三頁 終三行)

しょうぼう せつとくりよく
正法にもとづく説得力

(P29・5行/P21・9行)

雄弁とか、弁舌(べんぜつ)とかいうこと～ もっとも根本的な、もっとも大事なことは、どのような弁舌も、雄弁も、正しい法にもとづくものでなければならないということです。

～ 本当の弁舌というものは、何よりもまず正しい理法から湧き出るものであり、それによって相手の良識に訴え、相手を心から納得させ、すすんでは、その理解を情操(じょうそう)・信念にまで深める力を持ったものであるべきだ、ということができましよう。

わかやすいことばを使う

(P32・5行/P23・9行)

〈相手にとっていちばんわかりやすいことばを使う〉ということです。

ゆうべん やしな ちんもく
雄弁を養うのは沈黙

(P35・6行/P25・終6行)

ただペラペラしゃべるのが雄弁ではなく、必要なことだけを完全に、最高の効果をあげるように話すのが、真の雄弁であるということです。～ 釈尊は ～ 必要なときにだけ、必要なことだけをお話しになりました。

《息惺のひととき ①》

『「正法(正しい教え)に基づく説得」、『相手にとっていちばん解りやすい言葉』、『必要なときにだけ、必要なことだけを話す』ということが、人に何かを伝える時(説得する時)、この姿勢が一番大切である」と庭野開祖は説きます。

—— さて、私が「人に話をするとき」、また「何かを伝える時」、「人に指摘をする時」、以上の事柄を心がけているでしょうか？ 余計なことは言っていないか？ 大切なこと必要なこと以外を口にはしていないか？ 振り返ってみましよう。

くう ぼう 空 法

(P40・終3行/P29・終3行)

「空」ということを簡単にいえば、「この世の全てのものには、他から独立してそれだけで存在し、かつ永遠に変わることはないような本体、『我』というものはない」(諸法無我)というのです。そして「全ては因縁によって生じ、滅する」のが(因縁生起・諸行無常)、全てのものごとの『実相』だというのです。(すべての存在はただ一つ、同じ存在である)

そこから「万人・万物は平等であり、仏の慈悲によって生かされて常に大調和しているものである」という仏教の世界観・人生観が生まれるのです。

そして「すべてのものは、等しく慈悲(一体感)を持ち、すべてのものと大調和するところに『究極の安らぎ』がある」という高い救済観が導き出されているのであります。

つまり、〈空法(くぼう)こそ、仏教の根本真理だということができるのであります。

《息のひととき ②》

庭野開祖は「空」の教えを通して「すべてのものと大調和するところに『究極の安らぎ』がある」と説示しています。

この「空」の教えとは、「相手と一体になる」、「相手の立場になり切る」こと。表現を変えると「自分が全く相手と同じならば、自分もそうしたに違いない」と思うことです。そしてその実践によって『大調和』、『究極の安らぎ』を得ることになると教えていただいています。

— さて私たちは日々の生活において、この「相手と一体になる」、「相手の立場になり切る」ことを心がけているか？ 振り返りましょう。

しむげち 四無礙智

(P41・終3行/P30・8行)

法(ほう)無礙智 — 教えの根本である真理に滞りなく通達していること。

義(ぎ)無礙智 — 教えの内容・意味を滞りなく知り尽くしていること

辞(じ)無礙智 — 教えを説くのに、適切なことばを自由自在に駆使できること。

樂説(ぎょうせつ)無礙智 — 以上の智慧をもち、常に自ら進んで自由自在に法を説く。

ふるなはんぼしゆぎ 富樓那の半歩主義

(P45・4行/P33・4行)

仏教を心底から理解し、それに帰依すれば、すべての欲望が清らかなものとなって、いわゆる煩悩ではなくなってしまうわけです。

— すべての欲望がそのまま「清らかな欲望」になるのです。(P57・終4行/P42・終6行)

『人・天交接して兩つながら相見ることを得ん』 (一八五頁 終三行)

人間界全体に本当の仏教が広まれば、天上界との区別は殆んどなくなってしまうのです。

『^{ひぎょうじざい}飛行自在ならん』 (一八五頁 終行)

(P63・終4行/P47・1行)

仏の境地を悟って、現象の変化へのとらわれから離れて、自由自在な仏の境地に達したということです。(「我のこだわり・とらわれ」がなくなった状態。どこへでも飛んでいける)

『^{ほうきじき ぜんねつじき}法喜食・禅悦食』

(P64・4行/P47・終4行)

◎「法喜食」法を聞く喜び ◎「禅悦食」法を修行する喜び

《^{しゆい}息惟のひととき ③》

庭野開祖は『法喜食・ほうきじき・禅悦食・ぜんねつじき』は、信仰者にとっては非常に大切なこと(「大切な食べ物」)であると示しています。

— では私たちは、この『法喜食・禅悦食』を食していますか? (これらを自らの信仰の支え・活力源としていますか?) 振り返ってみましょう。

『^{うち ぼきつ ぎょう ひ ほか こ しょうもん げん}内に菩薩の行を秘し 外に是れ聲聞なりと現ず』 (一八七頁 三行)

すばらしいお言葉です。謙虚で、まじめな指導者の在り方を、まざまざと示されています。

『^{にんげん あらわ ぼさつ}人間として現れる菩薩』

(P79・終3行/P60・1行)

『^{しゅう さんどく またじゃけん そう げん しゅじゅ げんげ じ と しゅじょう こ}衆に三毒ありと示し 又邪見の相を現ず〜 種種の現化の事を説かば 衆生の是れ

を聞かん者 ^{き もの こころ すなわ ぎわく いた}心に則ち疑惑を懐かん』 (一八七頁四行)

《^{しゆい}息惟の分ひととき ④》

庭野開祖は「現実には様々な菩薩がいて、人々を悟らせるために、わざわざ三毒や邪見を現し示す菩薩さえいる」と説いています。

— では私はこれまで、「嫌な人・私を困らせる人・私を惑わせる人・怒りを覚える人…」を、私を悟らせるための「菩薩」だと見ていたか? また、そのように見た。とらえたことがあるか? 振り返ってみましょう。

『^{さいしよ で し きょうじんによ}最初のお弟子・憍陳如』

(P90・5行/P69・6行)

『^{ぐしや さと しゆだ}愚者にして悟った周陀』

(P105・6行/P79・終4行)

《^{しゆい}愚^惟のひととき ⑤》

シュリハンドクが悟った「心の塵・垢、貪る欲・怒り・自分の思い通りに振る舞う(貪・瞋・痴)を払う努力」というものを、私はしているか？ 振り返ってみましょう。

えりけいじゆ たと 衣裏繫珠の譬え

(P123・7行/P94・6行)

『^{しか}而^{なんじし}るを汝^{ごんく}知らずして、^{うのう}勤^{もつ}苦^{じかつ}・^{もと}憂^{はなは}惱^ちして以て自活を求むること、甚だこれ癡なり』

(一九一頁 終行)

『この宝石のことを知らず、日々の生活にあくせくし、苦勞したり心配したりして毎日を送っていたとは、本当に愚かなことだ』—— 本来自分に具わっている仏性に気づかず、煩惱が本来人間につきものの存在だと思い込んで、煩惱を除くことばかりにあくせく努力するのは、本末を転倒している愚かなことだ。(当然、自分の満足や欲望を満たすためだけに毎日を送ることは、さらに愚かなことです) ～ とにかく『自分にそなわっている仏性を自覚すること』が、救いに達する一番の近道であり、それが仏法の本道であります。

がん いっせ 〈願〉は一世のものではない

(P127・終5行/P98・1行)

『^{いっさいち}一切^{がんな}智^あの願^う猶お在って失せず』(一九二頁六行)

前世の修行と現世の修行のつながりが明白に説かれています。～ 我々の修行は今世だけのものではなく、過去世から来世へと成仏をめざして続いてゆくものなのです。～ 願いを持っていたからこそ、今世こうして遭い難き仏法、特に法華經に遭えることができたのです。

《^{しゆい}愚^惟のひととき ⑥》

「われわれの修行は今世だけのものではなく、過去世から来世へと、成仏をめざして続いてゆくものなのです。～ 願いを持っていたからこそ、今世こうして遭い難き仏法、特に法華經に遭えることができたのです」と庭野開祖は説かれています。
—— このご指導をあなたはどうか受け止めますか？ かみしめてみましょう。

『^{ほとけ}佛^{むじょうえ}の無^え上^{しこう}慧^{すなわ}を得^こて 爾^{しん}して乃^{めつ}ち爲^{のたも}れ真^{のたも}の滅^{のたも}なりと 言^う』(一九四頁 三行)

「仏の無上の智慧を得てこそ、真の涅槃に達したと言い得るのだ」と仰せになりました。

ぶっしょう むげ ほうじゆ 仏性こそ無価の宝珠

(P139・3行/P107・6行)

われわれは一人残らず〈仏性〉を持っているのです。けれども、なかなかそれを自覚できません。なぜ自覚できないかといえ、われわれが酔って眠りにけているからです。心が眠ったままでいるからです。われわれは、現象としてあらわれているこの肉体が自分の本質だと思い込んでいます。心はその肉体に付属しているものと思い込んでいます。そこで、ただもう肉体と心を満足させるために、欲望を追って右往左往し、衣食に追われてあくせくします。それが仏性を自覚しないということです。

《愚惟のひととき ⑦》

無明である凡夫は、「肉体・体」が自分のすべて（本質）だと思い、自分の「肉体と心」を満足させるために、欲望を追い、右往左往している人生を送ります。そして、「仏性」を持っていることを自覚していません。

— さて、自分はどうか？ 振り返ってみましょう。

えんぎ おし 縁起の教え

(P141・1行/P108・8行)

我々の肉体も、まわりの境遇も、この世の森羅万象（しんらばんしょう）も、すべて常に確固として実在するものではなく、因と縁が結ばれて生じている〈仮のあらわれ〉に過ぎないことを悟ることが、救いの第一歩であると教えられたのです。それがいわゆる『縁起の法則』の教えです。

じゆう そうぞう 自由と創造こそ

(P142・7行/P109・終7行)

特に人間は、自由自在に活動し、価値あるものを創造していくことを、本質としているのです。ですから、その本質すなわち『本当の自分(仏性)』というものを、しっかりとつかみ、心の底に確立しない限り、人間としての本当の生きがい、生きる喜びは感じられず、従って真の救いに達したとは言えません。お釈迦さまが最終的にお教えになりたかったのは、このところなのです。現象のうへでは大変頼りない身や心であっても、人間の本質は確固とした『不滅の仏性』であることを、はっきりと悟らせようとなさったわけです。

い 生かされているように生きる

(P145・終3行/P111・終4行)

自分の幸せを追い求めるだけでなく、世のため人のために積極的にはたらき、寂光土を作り出していき、そういう自由自在な活動こそが、我々の本来の姿なのだということを悟るのです。それを悟ることが仏さまと一体になることです。～ 〈生かされているように生きる〉というのは、自分も人々も幸せにしていこうとすることです。

あなたも普明如来

(P148・4行/P113・8行)

いかに地位は低くても、頭脳はすぐれていなくても、世のためになる自分の職業に精を出し、その人柄や生き方が、職場や家庭にひとすじの明るさを与えるようならば、その人は立派な普明如来のひとりであります。（世の中に光明を与え、それぞれの分野で世のためになる〈価値ある人間〉なること。そんな人を〈普明如来〉というのです）

《思惟のひととき ⑧》

「お釈迦さまがお教えになりたかったのは、『人間の本质は《仏性》である！』ということ」。

「自分の幸せだけを追い求めるのではなく、多くの人々にとって、世の中全体の救いの道は『仏性を自覚』し、『世のため人のために積極的にはたらくことを悟る』こと。これが『仏と一体になること』です。そして、『世のため人のために生きることが大切なのです』と庭野開祖は説いています。

— では私は、開祖が説くそのような『生き方』を心かけているか？ または目指しているか？ いかがでしょうか？ 振り返ってみましょう。

《思惟のふいかえり まとめ》

今日の『五百弟子受記品第八』の学びを通して、何を学び取ったか？
（何を一番強く感じ、受け止めることができたか？） かみしめてみましょう。

以上